

近年の脳科学の研究の蓄積と展開は、人文学や社会科学にとっても多くの知的刺激を提供してくれる。なかでも興味深いのが「ミラーニューロン」の発見である。この細胞は、近年の脳科学における最大の発見の一つとして、神経生理学に留まらない影響を与えている。本共同研究では態度という概念を検討するための補助線として応答性という概念を設定し、その検討を進めてきたが、第3回研究会の特別講師であった武井秀夫（千葉大学）は、人間の生得的な機能と考えられるミラーニューロンシステムに注目しつつ応答性を検討するという報告を行った。今回は、このニューロンシステムに注目しながら、応答性と態度について筆者なりに整理したい。

なお、筆者は神経生理学等については素人である。そのため以下の記述はごく部分的なものであり、その厳密さや適切さには不安が残る。詳細については、世界を代表する研究者による概説書の翻訳（リゾラッティ・シニガリア 2009、イアコポーニ 2011）があるのでご参照いただきたい。

ミラーニューロンとは、1990年代前半に、神経生理学者ジャコモ・リゾラッティを中心とするイタリアはパルマの研究チームによって報告された「特殊な」脳細胞である（リゾラッティ・シニガリア 2009）。この細胞は、自分が運動するときにも、他者の同様の運動を目で見ただけでもニューロンが反応する。さらに、運動行動に伴う音を聞くだけでも反応するものもある。自身の運動行動がない状態でも、他者の行動を知覚するだけで、それを「鏡」のように脳内で表象する働きを担うことから、この種の細胞はミラーニューロンと名づけられた。

この細胞は、サルを対象とした研究から発見されたが、それを基盤としながら、近年では人間を対象とした諸実験からもデータが集められている。そこから人間にもミラーニューロ

ンシステムがあり、同じような機能を果たしていることが次第に明らかになってきた。「私たちの脳にある一部の細胞——すなわちミラーニューロン——は、自分でサッカーボールを蹴ったときにも、ボールが蹴られるのをみたときにも、ボールが蹴られる音を聞いたときにも、果ては『蹴る』という単語を発したり聞いたりしただけでも、全て同じように発火する」（イアコポーニ 2011:24）のである。

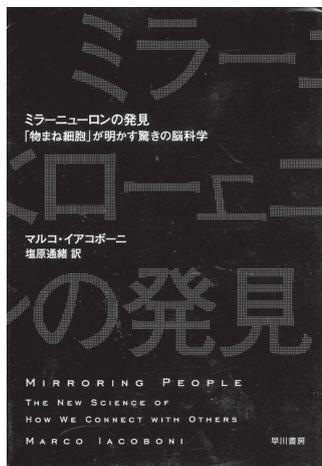
この機能から問い直すことのできるようなテーマはたくさんある。その一つが、「他者を理解する」という人間にとって当然のことでありながらも謎の多いテーマである。ミラーニューロンシステムは、このテーマに対して次のような仮説を提起する。つまり、他者の行動の「意図」の理解は、他者の行動の観察者自身の脳内で行われる一種のシミュレーションを介してであり、その基盤をミラーニューロンシステムが提供しているからではないか、というものである。この機能は、自身の行動のための身体運動を組織化するだけでなく、他者の行動の意味を理解する際にも用いられているというのである。その機能については、様々な実験を通じて徐々に実証されつつあるという。

こうした仮説と知見は、人間の社会性やコミュニケーション、模倣、心、言語の発達と進化といった、人類学も含む人文学や社会科学の中心的なテーマの多くに新たな光を投げかける可能性をもつ。本共同研究のキーワードの一つである応答性もまたそうである。このシステムに注目すれば、私たちは他者の行動に対して、自動的ともいえる脳内でのシミュレーションを通じて常に応答している（してしまっている）、あるいはドゥ・ヴァール（2010）の言葉を借りれば「共感」している（してしまっている）のであり、他者の行動の理解もこの応答や共感を介してなされているということができるのである。

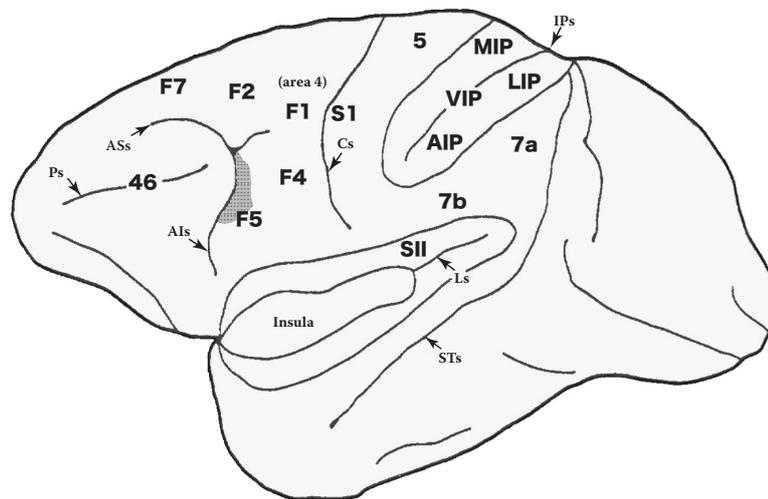
前回の報告（『民博通信』132号）において、フィールドで出会う人々、そして人類学者自身も、他者の行為や現場の状況に常に応えている存在として捉え直すことが本共同研究の共通認識であると述べたが、応答性あるいは共感とは、少なくともミラーニューロンシステムのレベルで見ると、人間（あるいはサルも含めて）の「本性」といえるのかもしれない。

とはいえ、本共同研究はいうまでもなく脳神経システムを研究するものではない。そうした知見からも裏打ちされる応答性の根源的な重要性を認め、そこから知的刺激を得つつも、それをいかに人類学における態度の研究に活かしていくのが肝心である。仮説的に応答性を人間の「本性」として試みることは、大きく二つの示唆を与えてくれると現時点で考えている。

まず、ミラーニューロンシステムにもとづく応答性の説明は、一対一の対面的なセッティングでは一定の説得力をもちうるが、本共同研究で想定している集合的な社会的現場においては、いくつかの困難に直面する。たとえば、親が子ども



ミラーニューロン関連の著作は近年、世界中で出版されている。書影は、世界的な研究者マルコ・イアコポーニの著作の翻訳『ミラーニューロンの発見』（2011年、早川書房）。



サルの脳の側面図。網掛け部のF5領域においてミラーニューロンが発見された。この部位はヒトの運動性言語野(ブローカ野)に相当する位置にある (Rizzolatti, Giacomo, et al. (1996) Premotor cortex and the recognition of motor actions, *Cognitive Brain Research* 3: 132より転載)。

を褒めている場面を見たとき、私たちは親と子どものどちらに
 応答や共感をしてしまうのだろう。属性を異にする複数の
 人々が集う場において、誰のどの行動に対して応答するのか、
 あるいはしないのか、ということを考えるならばさらに状況
 は複雑になる。

しかしながら私たちはそうした状況においても、それほど
 混乱することなく応答することができている。意識的に応答
 を制御し、抑制することがある程度はできるし、選択的に注
 意を払ったり払わなかったりすることで、共感のきっかけを
 統御することもできる。また一律に他者に応答し共感してい
 るわけではなく、自分とエスニシティや年齢、性別、職種な
 どが近い者、家族や友人などの身近な者に対してのほうが応
 答・共感しやすいことは、様々な研究が示唆するところであ
 る(ドゥ・ヴァール 2010: 117)。

こうした点を考慮すれば、応答性というものが生得的な基
 盤にもとづきながらも、社会文化的に構築あるいは修飾され
 たものであると想定できる。これを「態度」として捉えてみた
 い。態度は様々な定義されているが、この前提を踏まえ、
 他者に対する応答をある部分では促進し、別の部分は抑制す
 る型のようなものと位置づけることができる。そしてその性
 格ゆえに、態度は他者との応答の過程においてこそ身体化さ
 れるものといえる。「本性」としての応答性ゆえに私たちは他
 者に応答するが、応答性そのもので応答しているわけではな
 いのである。

しかし、ここで考えなければならないことは、たとえ態度
 という形で応答性に一定の社会文化的な型が与えられ、ある
 面での応答が抑制されているとしても、それはあくまで「抑
 制」であって、私たちの内的な機能としては応答してしまっ
 ており、ときにそれが行動に結びついてしまう、という点で
 ある。先述のように様々な他者が集う現場においても混乱す
 ることなく応答することができる一方で、それが常に適切に
 できるわけではなく、自分でも予期せぬ応答をしてしまうこ
 とがあることも経験的に知っている。悲しんではいけないと
 思いつつも涙が出てしまい、悲しみに飲まれてしまう。笑っ
 ては不謹慎だと感じつつも、こみ上げる笑いを堪えられない。

執着するつもりはないのにこだわってしまう。こうした「感
 情」と一般に呼ばれる領域において顕著なように、態度は応
 答性に対して社会文化的な型を提供するが、一方でそれは「本
 性」としての応答性ゆえにゆらぎ、破綻する契機を内在して
 いる。このために、社会的な現場の実践の過程が予期せぬ展
 開をみせることがあり、そのことが態度を見つめ直す契機に
 なることもあれば、態度をより強化し強要させる契機にもな
 るのである。ここに態度が社会文化的な応答の型として現場
 に一定の形式を与えつつも、現場における諸実践の過程にお
 いて構築されるという性格のものであることが示唆される。

2010年10月にスタートした本共同研究は1年目を終了し
 た。徳安祐子(九州歯科大学非常勤講師)と箕曲在弘(早稲田大
 学大学院文学研究科博士課程)のラオスでのフィールドワー
 クにもとづく示唆的な報告も含め3回の研究会を開催し、そ
 れを通じて基礎概念の整理を行ってきた。今後の課題は、こ
 うした理解を踏まえて各メンバーの事例を再検討していくと
 ともに、具体的な事例の検討を通じてこれまでの理解を批判
 的に検討しつつ、精緻化していくことである。この作業が、
 ひいては新たな民族誌的記述の可能性を開くことに繋がるこ
 とを期待している。

【参考文献】

イアコポーニ, マルコ 2011『ミラーニューロンの発見——「物まね細胞」が明か
 す驚きの脳科学』塩原通緒訳 早川書房。
 ドゥ・ヴァール, フランス 2010『共感の時代へ——動物行動学が教えてくれる
 こと』柴田裕之訳 紀伊國屋書店。
 リゾラッティ, ジャコモ・コラド・シニガリア 2009『ミラーニューロン』柴田裕
 之訳 紀伊國屋書店。

いわさ みつひろ

高知大学人文学部講師。専門は医療人類学、ラオス地域研究、生命倫理学。
 著作に『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』(鈴木七美・
 藤原久仁子との共編 御茶の水書房 2010年)、論文に「老親扶養からみた
 ラオス低地農村部における親子関係の一考察」(『文化人類学』75(4):602-
 613 2011年)など。